

朝の祈りの集い

早 祷



日本聖公会祈祷書（1959年版）より

早祷序式

主日には早祷につづいて聖餐式を行なわないとき、この序式を用いる。他にも用いてもよい。司式者は次の聖語の一節または数節を朗読する。

ハバクク書二章二〇節 / マラキ書一章一一節 / 詩一九篇一四節 / エゼキエル書一八章二七節 /
詩五一篇三節 / 詩五一篇九節 / 詩五一篇一七節 / ヨエル書二章一三節 / ダニエル書九章九、一〇節 /
エレミヤ記一〇章二四節 / マタイ伝三章二節 / ルカ伝一五章一八、一九節 / 詩一四三篇二節 /
ヨハネ第一書一章八、九節

司式者は次の勧告をする。かつこの中は省いてもよい。

勧 告

愛する兄弟よ、「聖書にしばしば、しるせるごとく、天の父・全能の神は罪を懺悔すべきことを勧めたもう。我ら多くの罪を犯したれば、包みかくすことなく、まことに悔やみ、謙そんなる心にてこれを言いあらわし、父の深きあわれみによりて赦しを求むべし。これはいつにてもなすべきことなり。しかれども相ともに集まりて、父の御手より受けし大いなる恵みを謝し、御名をほめ、御言葉をきき、からだと魂とに必要なものを願う時には、格別になすべきことなり。ゆえに」恵みの御座にむかい、きよき心と静かなる声をもって懺悔し奉るべし

一同ひざまずいて次の懺悔をする。

懺 悔

あわれみ深き全能の父よ、我らは迷える羊のごとく父の道を離れ、多くおのれの工夫と欲に従い、主の聖なる律法をおかし、なすべき事をなさず、なすべからず事をなし、全きところあることなし。しかれども父よ、主イエス＝キリストをもって世の人に約したまえるごとく、罪に悩める者をあわれみたまえ。とがを懺悔するものを赦したまえ。悔やめる者をかえしたまえ。あわれみふかき父よ、願わくは今よりのち神を敬い、正しきを行ない、身を修めて、御名の栄光をあらわすことを、イエス＝キリストのいさおによりて得させたまえ アーメン

特に示したときのほか、一同でアーメンと言う。但し、アーメンの前に「。」の、くぎり符号があるとき、司式者は言わない。以下これにならう。
司祭は立って次のように言う。

赦 罪

我らの主イエス＝キリストの父・全能の神は、罪びとの死ぬることを好まず、悪より帰りて生くることを望み、又その仕えびとに権威をあたえて、主の民に罪の赦しを告ぐることを命じたまえり。神は、まことに悔い改めて福音を信ずる者をことごとく赦したもう。願わくはあわれみ深き全能の神、なんじらの罪を赦し、恵みと力を与え、悔い改めにかのう新たなる生涯を送らしめたまわんことを。アーメン

早 禱

一同ひざまずき、準備の黙祷の後に次の唱和を用いる。

司式者 主よ、我らの口を開きたまえ

会衆 我ら主の誉れをあらわすべし

司式者 神よ、すみやかに我らを救いたまえ

会衆 主よ、とく、きたりて我らを助けたまえ

ここで一同立つ。

司式者 父と子と聖霊に栄光あれ

会衆 始めにあり、今あり、世々限りなくあるなり アーメン

司式者 なんじら主をほめまつれ

会衆 主の御名をほめまつるべし

ここで次の詩を歌いまたは唱える。降誕節、顕現日とその後の七日間、復活節、昇天節、聖霊降臨節、三位一体主日、その他の祝日には第八節以下を省いてもよい。復活日とその後の六日間は、この詩にかえて復活の頌(二六八頁)を用いる。

詩九十五篇

一 いざ我ら主にむかいてうたい | 救いの岩に向かいて喜ばしき声をあげん

二 我ら感謝をもてその御前にゆき | 主に向かい歌をもて喜ばしき声をあげん

(次頁に続く)

詩九十五篇

三 主は大いなる神なり | もろもろの神にまされる大いなる王なり

四 地の深き所みなその手にあり | 山の頂もまた神のものなり

五 海は神のもの、その造りたもうところなり | かわける地もまたその手にてつくりたまえり

六 いざ我ら拝みひれ伏し | 我らを造れる主の御前に、ひざまずくべし

七 主は我らの神なり | 我らはその牧の民、その手のひつじなり

八 きょうなんじら御声をきけよかし | なんじら荒れ野にて神を試み、かつ怒らしし日のごとく、心をかたくなにするなかれ

九 その時なんじらの親たち我をこころみ | 我をためし、わがわざをみたり

一〇 我その世のために憂いて、四十年を経たり | われ言えり「彼らは心あやまれる民、わが道を知らざりき」

一一 このゆえに我いきどおりて誓えり | 「彼らはわが休みに入るべからず」と

父と子と聖霊に | 栄光あれ

始めにあり、今あり | 世々限りなくあるなり アーメン

詩 篇

ここで定められた詩篇を歌いまたは唱える。但し詩九十五篇は重ねて用いない。

一篇終わるごとに栄光の頌を用いる。

第一日課

日課を朗読する前に、「——(書)第一章一節より」と言い、読み終われば、「第一日課終わる」と言う。第二日課のときもこれにならう。第一日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。但し復活日から三位一体主日までを除く平日には万物の頌を用いてもよい。降臨節、大斎前節、大斎節の主日、斎日、平日および聖職按手節(聖霊降臨節を除く)には万物の頌を用いる。

賛美の頌

- 一 我ら神をほめまつり | 神を主なりと信認す
- 二 全地はとこしえの父を | あがめたてまつる
- 三 御使いと天のうちの、ちからあるもの | みな主にむかいて歌い
- 四 ケルビムとセラピム | 絶え間なく歌いていわく
- 五 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな | 万軍の神なる主
- 六 主の栄光あるみいつ | 天地に満つと
- 七 栄光ある使徒のくみ | みな主をほめまつる
- 八 誉れある預言者のむれ | みな主をほめまつる
- 九 白き衣の殉教者のたい | みな主をほめまつる
- 一〇 天下の聖公会 | みな主を信認す
- 一一 そは、はなり無き | みいつある父

(次頁に続く)

賛美の頌

- 一二 まことなるひとりの御子 | なぐさめ主なる聖霊なり
- 一三 キリストよ | 主は栄光の王なり
- 一四 主は父の | とこしえにいます御子なり
- 一五 主は人を救わんため、人となりたもうとき | おとめの胎をも厭いたまわざりき
- 一六 主は死の苦しみに勝ちて | すべての信徒のため天国の門を開きたまいぬ
- 一七 主は父の栄光のうちにて | 神の右に座したまえり
- 一八 またふたたびきたりて | 我らをさばきたもうことを信ず
- 一九 ゆえに尊き血にて贖いたまいししもべを | 助けたまわんことを祈りたてまつる
- 二〇 我らを主に聖徒につらねて | 限りなき栄光を得させたまえ
- 二一 主よ、主の民をすくい | 主のゆずりをさきわいたまえ
- 二二 彼らをやしないて | とこしえに、いだきたすけたまえ
- 二三 われら日々に | 主をあがめまつる
- 二四 我ら世々かぎりなく | 御名をほめまつる
- 二五 主よ、きょう我らをまもりて | 罪を犯すことなからしめたまえ
- 二六 主よ、我らをあわれみたまえ | 我らをあわれみたまえ

(次頁に続く)

賛美の頌

二七 主よ、我ら主にたよれり | 我らをあわれみたまえ

二八 主よ、我は主にたよれり | 我に限りなく恥なからしめたまえ

万物の頌

平日には三節から二十五節までを省いてもよい。

一 主の万物よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

二 主の御使いよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

三 もろもろの天よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

四 空の上の水よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

五 主の万軍よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

六 日と月よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

七 空の星よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

八 雨と露よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

九 風よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

一〇 火と熱よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

(次頁に続く)

万物の頌

- 一一 冬と夏よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一二 露と霜よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一三 あられと寒さよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一四 氷と雪よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一五 夜と昼よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一六 明かきと暗きよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一七 いなずまと雲よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一八 地よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 一九 山と岡よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二〇 地に生うるすべての草木よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二一 泉よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二二 海と川よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二三 鯨とすべて水に泳ぐものよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二四 空を飛ぶ鳥よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二五 野獣と家畜よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

(次頁に続く)

万物の頌

- 二六 世の人よ、みな主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二七 イスラエルよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二八 主の祭司よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 二九 主のしもべよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 三〇 義人の魂よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 三一 心きよく、へりくだる者よ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 三二 ハナニヤとアザリヤとミサエルよ、主を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 三三 父と子と聖霊を祝い | 世々歌いあがめまつれ
- 三四 天の大空にまします主を祝い | 世々歌いあがめまつれ

第二日課

第二日課の後に次の頌を歌いまたは唱える。この頌の前にその日にふさわしい聖歌を用いることができる。ザカリヤの頌にかえて詩百篇を用いてもよい。

ザカリヤの頌

- 一 ほむべきかな、主イスラエルの神 | その民をかえりみて、あがないをなし
- 二 我らのために救いの角を | そのしもべダビデの家に立てたまえり
- 三 これぞ、いにしえより | 聖預言者の口をもて言いたまいしごとく
- 四 我らをあだより、すべて我らを憎む者の手より | 取りいだしたもう救いなる
- 五 我らの先祖にあわれみをたれて | その聖なる契約をおぼし
- 六 我らの先祖アブラハムに | 立てたまひし御誓いを忘れずして
- 七 我らをあだの手より救い | 生涯主のみまえに
- 八 聖と義とをもて | おそれなく仕えしめたもうなり
- 九 幼な子よ、なんじはいと高き者の預言者ととなえられん | これ主の御前にさきだち行きて、その道をそなえ
- 一〇 主の民に罪のゆるしによる救いを | 知らしむればなり
- 一一 これ我らの神の深きあわれみによるなり | このあわれみによりて、あしたの光うえよりのぞみ
- 一二 暗きと死の陰とに座する者をてらし | 我らの足を平和の道にみちびかん
父と子と聖霊に | 栄光あれ
始めにあり、今あり | 世々限りなくあるなり アーメン

ここで聖餐式にうつることができる。またその前に嘆願を用いてもよい。

一同使徒信經を歌いまたは唱える。

使徒信經

我は天地の造り主・全能の父なる神を信ず

我はそのひとり子・我らの主イエス＝キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ＝ピラトのとき苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみにくだり、三日目に死にし者のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん

我は聖霊を信ず。また聖公会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだのよみがえり、限りなき命を信ず アーメン

一同ひざまずく。以下、恵みのための祈りまでを歌ってもよい。

司式者 主よ、あわれみたまえ

会衆 キリストよ、あわれみたまえ

司式者 主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にまします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。

御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行わしめたまえ。

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。

我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。

我らを試みにあわせず、悪より救いいただいたまえ アーメン

ここで司式者は立つ。

司式者 主よ、あわれみを我らに現わしたまえ

会衆 主の救いをあたえたまえ

司式者 主よ、正しきをもって主の仕えびとを装いたまえ

会衆 主の聖徒を喜ばせたまえ

司式者 主よ、主の民を救いたまえ

会衆 主のゆずりを祝したまえ

司式者 主よ、この世を安らかに治めたまえ

会衆 地のはてまで戦いをやめしめたまえ

司式者 神よ、我らの心をきよめたまえ

会衆 我らより聖霊を取りたもうなかれ

司式者 主なんじらとともにいますことを

会衆 主なんじの霊とともにいますことを

司式者 我ら祈るべし

特 禱

ここで当日の特禱を用い、つづいて次の二つの特禱を用いる。

平安のため

親しみを好み、平安をあたえたもう神よ、主を知るはこれ限りなき命なり、主に仕うるはこれ全き自由なり。願わくは常にしもべらを守り、すべて攻めきたる敵を防ぎ、いかなる強きあだをも恐れず、堅く主にたよりて安んずることを得させたまえ。全能の主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

恵みのため

天の父、かぎりなく生ける全能の神よ、我らを今朝まで安全に至らせたまえるごとく、今日も大いなる力をもって守りたまえ。願わくは罪に陥らず、危うきことにもあわず、常に主の導きをこうむり正しき行ないをなすことを得させたまえ。主イエス＝キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

ここで司式者はひざまずき、諸祈祷、嘆願、感謝を用いてもよい。

六 一般的に用うる感謝(125ページ)

一同で唱える。

全能の神・慈悲の父よ、我らと人々の豊かなる恵みをくださったもうことを感謝し奉る。主は我らを造り、我らを守り、この世の物をあたえ、ことに主イエス＝キリストにより世を贖いて量りなき愛をあらわし、恵みを受くる法を示し、のちの世の栄光の望みをいだかしめたまえり。願わくはこのもろもろの恵みに深く感じ、ただ言葉のみを用いず、おのれをささげて主に仕え、生涯きよき行ないを用いて主の栄光をあらわすことを、イエス＝キリストによりて得させたまえ。願わくは誉れと栄えかぎりなく父と子と聖霊にあらんことを。アーメン

三七 キリソストムの祈り(123ページ)

今ここを合わせて主に祈る恵みを与えたまえる全能の神よ、御名によりて両三人あつまる時は、その願いを許さんと約したまえり。願わくは我らの益をはかりて望みと願いを遂げしめ、この世においては主の道を悟り、後の世においては限りなき命に至ることを得させたまえ。アーメン

終わりに次のように言う。

願わくは主イエス＝キリストの恵み、神のいつくしみ、聖霊のまじわり、我らとともに限りなくあらんことを。
アーメン